



特別プログラム「国際教養学部
 オープンキャンパスにおける
 学生企画」の活動の様子

PROJECT
 STATUS
 REPORT

「集約ターム」「ギャップターム」の活用状況

学生たちの受講データ・アンケート調査から

2022年度より、国際教養学部の3年生のカリキュラムが、「集約ターム」と「セルフデザインギャップターム」を組み合わせた形に刷新されました。第1タームと第4タームは、横断する学問領域の教員による講義や演習を集中的に受講する期間になりました(集約ターム)。逆に第2-3タームと第5-6タームでは、原則として必修科目がなくなり、個々の学生が学内外での学びをカスタマイズする期間となりました(セルフデザインギャップターム)。それでは、このようなメリハリのある新しいカリキュラム下で、学生たちはどのような学びを経験してきたのでしょうか。今号では、2022年度、2023年度にそれぞれII-BEATのカリキュラムを経験した学生たちのデータやアンケート回答から、学生たちが集約タームやセルフデザインギャップタームをどのように活用しているか、また、II-BEATのカリキュラムをどのようにとらえているのかを紹介합니다。

調査概要

回答者 2023年度4年生89名、3年生84名
 実施時期 2024年1月下旬
 形式 google formを用いたwebアンケート

CURRICULUM	
T1	集約ターム
T2	セルフデザインギャップターム
T3	セルフデザインギャップターム
T4	集約ターム
T5	セルフデザインギャップターム
T6	セルフデザインギャップターム



「持続的・地域貢献活動実習」での
 野外実習の様子

セルフデザインギャップターム

T2-3、T5-6それぞれのセルフデザインギャップタームにおいて、学生たちはどのような活動に力を入れていたのでしょうか。特に力を入れていた活動について、3つまで回答してもらった結果がFigure 1のグラフです。

まず、T2-3、T5-6いずれに関しても、約3分の1の学生は、セルフデザインギャップタームであっても、通常のタームと同様に授業に力を入れていたことが分かります。また教員による特別プログラムに関しては、プログラム自体の数も多いT2-3の方がより積極的に受講されていました。

最も多い割合の学生が力を入れていたのはインターンや就職活動で、特にT5-6に関しては半数以上が回答していました。公務員試験や大学院試験の対策のための自主的な学

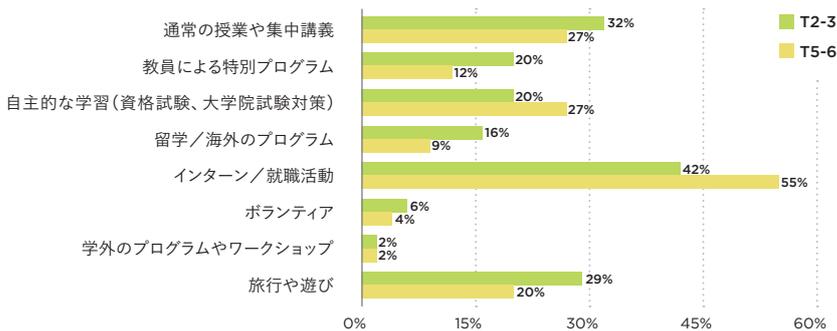


Figure 1 セルフデザインギャップタームにおいて力を入れていた活動

習をしていた学生も含めると、高い割合の学生が、T5-6のギャップタームを就職・進学に関する活動に活用していたと言えます。その他、T2-3には夏休みも含まれているため、旅行や遊びといった余暇活動も積極的に行われていました。

なお海外留学を行った割合はあまり高くありませんでしたが、これはII-BEATのカリキュラムの導入が入学後に決定したため、多くの学生が入学当初にギャップタームのあった2年次に留学を済ませていたことが影響していると考えられます。それゆえ、3年次のギャップタームの中で留学に行く学生の数は、今後増加していくと考えられます。

モジュールコース

次に、T4の集約タームに開設されたモジュールコースについての傾向を見ていきます。モジュールコースとは、共通したテーマを扱った3つの授業を並行して履修することで、そのテーマについての学びを多様な角度から深めていくことを狙いとしたものです。モジュールコースは、2022年度に3コースからスタートし、2023年度には、新たに「スポーツ振興研究」が加わりました。

2022-23年度、各モジュールコースの履修者数(科目A・B・Cをすべて履修登録した学生の数)はFigure 2の通りでした。

	移民・難民論研究	地方・地域振興研究	総合環境科学研究	スポーツ振興研究
科目A	移民論/NGO・NPO論*	地方創生論	科学と社会的意思決定	地方創生論
科目B	フィールドから学ぶ	千葉の地域資源と活用	社会と科学技術の界面	スポーツとまちづくり
科目C	移民・難民特別演習	地方・地域振興特別演習	総合環境科学特別演習	スポーツ振興研究特別演習
2022年度	9名	13名	12名	- (未開講)
2023年度	10名	14名	5名	7名

Figure 2 集約ターム・各モジュールコースの受講者数(2022-2023年度)

*「移民・難民論研究」の科目Aは、年度によって設定されている科目が異なる。

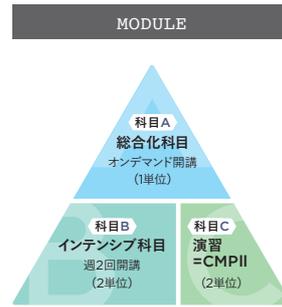
コース別では、「地方・地域振興研究」のコースを受講した学生が最も多く、全体としては約3割強の学生が履修していることが分かります。

アンケートにおけるモジュールコースに関する意見を参照すると、「それぞれの関連性、連続性があったことを実感し、研究したいテーマについて考える際に非常に参考になったので、特定の分野を学びたい人にとっては最適だと思う」という回答のように、自身のメジャープロジェクトで扱うテーマと関連したコースがある学生にとっては、 이슈を深めていく上の有意義なものになっていたようです。他方で、「他の分野でのモジュールコースの開講があればぜひ受講したかった。受講したい分野がないのが受講しなかった理由なのでもっと分野を充実させてほしい」といった声は少なくありませんでした。II-BEATでは、今後も関連した授業を集約し、新たなコースの開講を検討していきます。

新しいカリキュラム全体について

最後に、メリハリのある新しいカリキュラム全体に対する、学生の声を見ていきます。

まず、セルフデザインギャップタームができたことへの印象を「良かった」～「良くなかった」までの5段階で尋ねた項目への回答傾向はFigure 3の通りでした。



モジュールコースは、テーマに関する基礎的な知識を身につける「科目A」、テーマについてより深く学ぶ「科目B」、それらをもとに自らがイシューを探索する「科目C」の3科目から構成される。これらを同タームに開講することで、そのテーマについて多様な角度から集約的な学びを促す。

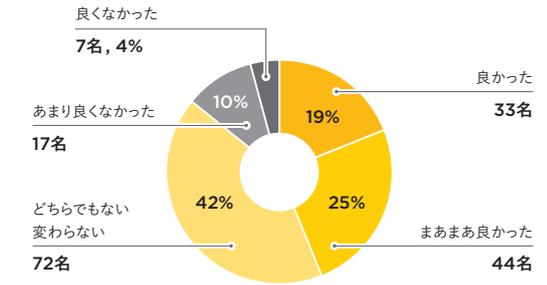


Figure 3 新しいカリキュラムに対する印象

新しいカリキュラムを肯定的に捉えている割合は4割強、「どちらでもない / (従来と) 変わらない」と回答している割合も約4割という結果でした。

新しいカリキュラムに対するポジティブな意見、ネガティブな意見を、自由記述の回答からそれぞれ詳しく見てみましょう。

ポジティブな意見

- この1月から留学だったので、必修がなかったことが履修を考えると上でよかった。
- T1・T4が集約で大変だが、その忙しさゆえにギャップタームの間の暇に耐えられずにプログラムに応募したり、活動を計画したりした節があるので、緩急の付け方は良いと思う。こうした時間に自主的活動を促す雰囲気がいれば、活動も活性化するのはないだろうか。
- 「自主設計科目」として就職活動の一環として参加したインターンシップを算入できたのは大変ありがたかった。

ネガティブな意見

- T4に授業が集中しすぎていて、課題の管理などが大変だったのでもう少し分散させて良かったのではないかと考えた。
- 3年次のT1まで長期留学をしていたため、必修の授業を受けづらく逆に難儀した。
- 時間の使い方に計画性がある人には、非常に有効なカリキュラムだと思いますが、そうでない人向けにこの時期の過ごし方のより詳細な説明をしてほしい。

ポジティブな意見としては、「セルフデザインギャップタームを有効活用できた」というものが多かったと言えます。留学やインターンなど、比較的長期に及ぶ活動を体験しやすいという点が、学生にとっても一つの大きなメリットであったようです。

他方でネガティブな意見としては、「集約タームの忙しさ」を挙げる声が目立ちました。ギャップタームが設けられた分、集約タームに履修する授業が増えているため、課題が多くなっていった学生もいたようです。また、自分が経験したい学外の活動がT1・T4に重なっていた学生には、逆にこの時期に授業が集約されていることがデメリットになったようです。

また「ギャップタームの過ごし方の説明が欲しい」という意見はとても重要で、今後「ギャップタームの活用の仕方」のモデルについて、過去に経験した先輩学生の事例を情報収集・整理し、ガイダンス等を通じて紹介していきたいと思っています。



特別プログラム「創造的ワークショップデザイン」展開でのグループワークの様子

「II-BEAT」2年度目のカリキュラムが終了

2022年度より本格的にスタートした、II-BEATによる新しいカリキュラムの2年度目が終了しました。

モジュールコースには、従来の3コースに加

え、新たに「スポーツ振興研究」が設置され、7名の学生が受講しました。またセルフデザインギャップチームには、第2-3タームに13科目、第5-6タームに9科目の特別プログラムが開講され、受

講者数も大きく増加しました。学生たちがこれらの学びや経験を生かし、それぞれのメジャープロジェクト(卒業研究・卒業制作)をより深化・発展させていくことが期待されます。

TOPIC-1 Interview

教員インタビュー

田島 翔太

Shota Tajima

モジュールコース「地方・地域振興研究」の科目B・Cの授業を担当し、セルフデザインギャップチームでは様々な地域でのPBL型のプログラムを開講されている田島先生に、自身の研究や教育活動などについて伺いました。

——自身の中心的な研究のテーマや、最近のご関心を教えてください。

大きく分けて2つあって、1つが「地域創生」、もう1つが「オフグリッド可搬空間」です。「地域創生」は、主に地方の衰退や人口減少問題に対して、私自身が人口6,000人強の長柄町という小さな町に移住して、実際に地域の課題を体験しながらその解決に取り組んでいます。また、2018年に「ミライノラボ」という大学発の研究成果活用型ベンチャーを立ち上げて、学生の力を借りながら実践的な活動もしています。「オフグリッド可搬空間」は、エネルギーを自給自足する移動空間のことで、2022年に、「エコキャビン(EcoCabin)」というプロトタイプをつくりました。実証実験として、エコキャビンを使ったコーヒースタンドやイルミネーションイベントを開いて、地域住民が集まるコミュニティの場をつくり、システム思考を用いた検証をおこなっています。地域創生もオフグリッド可搬空間も、「持続可能なまちづくり」という1つの分野として考えています。持続可能なまちづくりといっても、さまざまなテーマやアプローチがあります。いろいろな研究者が取り組んでいますが、オフグリッド可搬空間を地域創生に活かす研究は、おそらく私ぐらいしかやっていないですね。



エコキャビンを使った「オヒサマコーヒー」の開催風景(長柄町)

——先生自身の研究の特徴を教えてください。

実践的研究ですね。理論を構築して仮説を立て

ることはもちろん大事ですけど、でも、実際自分のアイデアが地域住民に役立つかどうかはわからない。時間も手間もかかるけれど、研究のプロセスの中に、地域住民や自治体の人の意見を取り入れてアイデアを作り上げていく。デザイン思考と呼ばれるものです。その過程に参加することで、学生にとっても新しい視点を得る機会になっていると思っています。

私は、長柄町に入り、町のアドバイザーをやっているのもあって、地域住民や自治体が手伝ってくれます。さまざまな社会実験と一緒に、ダイレクトにできて、その反応がみられる環境があるということも、私の研究の特徴だと思います。

——国際教養学部で研究や教育を行うことの面白さ、難しさはありますか。

面白いことの方が多いです。自分も知らないことがいっぱいあるので、学生から日々新しいことを学べるということですかね。例えば、今の指導学生に、予防医学や主観的健康観を扱っている学生がいるのですが、私はその分野の理論や方法論を知らないで、学生が他の先生に相談して学んだり、自分で調べてきたりして、教えてくれることがあります。そういう色々な分野の先生がいて相談できるというのは、国際教養学部のすごく良いところだと思います。また、持続可能なまちづくりでは、長柄町の特産品開発をやっていました。私は長柄町に住んでいるので、農業が盛んで、お米を作っていることを当たり前で思っていたのですが、学生のフィルターを通すと、「これを米粉にして使った方が、もっと利用できるし、効果もあるんじゃないか」ということで、米粉を使った特産品開発に取り組んだことがありました。学生と一緒に地域を別の視点で見て、新たな発想が生まれることも楽しいです。

——先生のメジャープロジェクトの指導学生はど

のようなテーマに取り組んでいますか。

持続可能なまちづくりという共通点があります。細かくみると、予防医学、特産品開発、コミュニティの場づくり、外国人との共生、ワーケーション、空き家活用、SDGsなど、テーマは多様です。研究のテーマによってアプローチする方法も違うので、はじめはそれぞれが先行研究を調べ、方法論を学んでもらっています。

私の指導学生には、自身の研究をやりながら、地域での実践的なプロジェクトに参加してもらっています。ずっと自分の研究だけで、パソコンの画面ばかり見ていると社会との接点がなくなってしまいますので。例えば、「稲毛コレティブ・インパクト」という、自治体、企業、NPOの人が集まって稲毛地域の魅力向上を考える活動や、松戸市の常盤平団地で、市役所や自治会と一緒に若者が住みたくなるまちづくりに取り組んでいる学生もいます。

プロジェクトは、学生自身の研究テーマと全く違うこともあるかもしれませんが、地域での経験や体験は必ず自身の研究に役立つ学びがあると思っています。

——先生から見た国際教養学部の魅力を教えてください。

まずは幅広い専門分野の先生がたくさんいるところ。先生方はみんな教育熱心なので、学生の学習意欲に応えてくれると思います。もう1つはセルフデザインギャップチームという仕組みができたことです。上手く活用すれば4ヶ月間を自由に使える仕組みになっているので、留学しながら授業も受けられるなど、自由度がとても高いと思います。国際教養学部では、学生は専門が決まっていなために悩むことも多いと思います。しかし、社会が目まぐるしく変化している中で、柔軟に研究テーマや進路を選んで、未来を自分で決められるという可能性の広さがこの学部の魅力だと思います。

(聞き手：国際教養学部3年 新妻・高橋)

たじま しょうた

千葉大学大学院国際学術研究院助教。千葉大学コミュニティ・イノベーションオフィス国際連携部門長、千葉大学学術研究・イノベーション推進機構(IMO)、株式会社ミライノラボ代表取締役CEO、千葉県長生郡長柄町タウンアドバイザー兼務。博士(工学)。研究分野は、地域デザイン学。コレティブ・インパクト、CCRC、オフグリッド可搬空間などに関する研究を行う。主な作品に、「EcoCabin(双葉電子記念財団賞)」、「リソルの森ウェルネストラック(日本サインデザイン賞)」、「ながらとカラナいろはにほへと」など。

シンポジウム

『ターム制の効用と問題点

–メリハリをつけた学期制の可能性–』を開催

2024年1月17日(水)14:00~16:20に、標記シンポジウムをオンラインで開催いたしました。本学教職員のほか、他大学の教職員、文部科学省、民間企業等から多くの皆様にご参加いただきました。

はじめに、本学の小澤弘明理事(教育担当)より、開会挨拶を兼ねて、本シンポジウム開催の趣旨説明が行われました。その中では、ターム制(夏休み、春休みもタームと捉える6学期制)が導入された背景や目的が示され、授業形態の柔軟化、海外体験の機会増、教員の研究時間の確保など、期待される効用について説明がなされました。

続いて、和田健教授(大学院国際学術研究院長、国際教養学部長)から、「国際教養学部II-BEATにおけるメリハリをつけたカリキュラム」として事業報告が行われました。その中では、本学国際教養学部の「課題(イシュー)の解決を実現する能力を培う」コンセプトや、II-BEATで改変を行ったインテンシブに学ぶカリキュラムについて示されました。また、集約タームとセルフデザインギャップタームの組み合わせにおける効果検証の必要性や、全学にむけた水平展開における課題が共有されました。

その後、他大学での実践例として、まず近田政博教授(神戸大学大学教育推進機構 大学教育

センター教授、教養教育院副院長)から「神戸大学における2学期クォーター制」と題した講演をいただきました。その中では、神戸大学で同制度を導入した経緯と、学生、教員、職員からの反応をご提示いただきました。特に、どのような部分に運用への期待と難しさがあったかという具体例が示され、導入に際して共通して乗り越えるべき課題と今後のターム制運用におけるヒントをご教示いただきました。

もう1つの事例として、岡田悦典教授(南山大学副学長)から、「南山大学のクォーター制:週2回開講授業の導入と運用、及びその教育効果」と題した講演をいただきました。南山大学における、週2回授業を積極的に組み込んだクォーター制導入の経緯や具体的な運用方法について、ギャップタームに展開しているプログラムや、クォーター制導入に伴うメリット・デメリットなども含めて、ご説明いただきました。その中では、大学独自の課題が立ち現れるため、個々の状況に即して考えていくことの重要性が示されました。

休憩後、縣拓充特任講師(大学院国際学術研究院)をモデレーターとし、近田教授、岡田教授、和田教授および小泉佳右准教授(大学院国際学術研究院 准教授/全学教育センター)の4名をパネリストに迎え、「ターム制の可能性と課題」をテ



ーマにパネルディスカッションが行われました。ここでは、週2回開講授業を実施して得られたメリット・デメリットに関する示唆や、メリハリをつけたカリキュラム運用の展開方法、学部や領域ごとの相性や難しさなどが、神戸大学、南山大学そして千葉大学それぞれの事例を深掘りしながら議論されました。開催後に実施した参加者アンケートでは、特にクォーター制、ターム制の導入を検討している教職員からの「参考になった」という意見が多数寄せられ、引き続きこの議論を深めていく意義を再認識できたシンポジウムとなりました。

シンポジウム『ターム制の効用と問題点 –メリハリをつけた学期制の可能性–』プログラム

趣旨説明

「千葉大学におけるターム制導入の経緯」

小澤 弘明 (千葉大学理事(教育担当))

事業報告

「国際教養学部II-BEATにおけるメリハリをつけたカリキュラム」

和田 健 (千葉大学大学院国際学術研究院 研究院長・教授/国際教養学部長)

講演 1

「神戸大学における2学期クォーター制:導入のねらいとその成果や課題」

近田 政博氏 (神戸大学大学教育推進機構 大学教育研究センター 教授/教養教育院副院長)

講演 2

「南山大学のクォーター制:週2回開講授業の導入と運用、及びその教育効果」

岡田 悦典氏 (南山大学 副学長(学務担当)/法学部 教授)

パネルディスカッション

「多分野を総合する力をいかに育むか」

パネリスト: 近田 政博氏・岡田 悦典氏・和田 健・小泉 佳右 (千葉大学大学院国際学術研究院 准教授/全学教育センター)

モデレーター: 縣 拓充 (千葉大学大学院国際学術研究院 特任講師)



小澤 弘明



和田 健



近田 政博氏



岡田 悦典氏



小泉 佳右



縣 拓充

